

# 短編集「雨ーアメジストの指輪」

とかけのしっぽ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリジナルの短編です。

久しぶりに宮沢賢治さんの「銀河鉄道の夜」を読んだら泣いてしま  
うぐらい感動して、なにかファンタジーを書きたくなりました。

新しい話を思いついたら、順番に載せていきます。

目次

雨ーアメジストの指輪	1
秋のかき氷	10
sea	17
ほうきぼし	26

## 雨——アメジストの指輪

雨：飴玉、アメリカ、アメジスト。

こんな言葉の遊戯をしたことはないですか。初めの文字のふたつだけを連ねて、なにか面白そうな物語を考えるのです。

眠れない夜に、暗闇が風の音さえも飲み込んで、しんと静かすぎる掛け布団の中で。羊の数を数えるのもいいでしょう。毎日飽きもせずにそれで眠れる人は立派です。でも、ちよつと違うことを試してみるのもいいと思うのです。目を瞑って物語を考えていると、次第に夢想はふくらんでゆきます。海の波が砂浜をさあーツと攫っていくみたいに世界中に広がって、ああ主人公は私自身だった、と気づいた時にはまわりすべてがもう夢の空間なのです。

さて、六月のある晩：何日だったかは、忘れてしまいました。とにかく、あれはちようど梅雨の時期でした。小糠雨がひんやり窓の網戸から流れてきて、あれえ布団がカビちや困るなあ、なんて思いながら右手だけ伸ばして窓を閉めたのはハッキリ覚えているのですから。

ええ、梅雨だからと言つて、紫陽花を愛でたりする遊び心は私にはありませんでしたよ。夜ですから外は真っ暗、そうでなくとも金属に縁取られた灰色の窓から見えるのは、隣の家鉄筋コンクリートだけで緑色の欠片もない殺風景ばかりと決まっていますから。

：さあ、そんな夜の夢日記です。ふと適当に思いついた飾り気も何もない題名ですが、案外気に入っています。さあつといきなりふき込んだ時に、枕を少しだけ濡らしてくれましたね。——『雨』

◆？

「おつかさん、外はねえ、ゴーゴーザーザー物凄い雨だったのよ。せつかく掲げた学校のアメリカ国旗が、千切れそうに捲れ返っていてね。みんながそのまま放つといたから、もう今頃飛んで行っちゃったんじゃないかしら。」

エヴァが頭のとっぺんからつま先まで、川に飛び込んで泳いできたんじゃないかと思うくらいびっしよりの格好で玄関に飛び込んできて、しかも突然そんなことを言ったのですから。お母さんはもう大慌てでふわふわのタオルを引っ掴み、エヴァの方へ鞠玉みたいに飛んできました。

エヴァを特大のバスタオルに埋めながら、お母さんは太っちょの体をゆらゆら揺らします。

「まあ随分帰りが早かったのねえ。気のいいスクールバスのおじさんが気を利かせてくれたのかしら。」

「そうよ、そうよ。先生たちがいろいろな所に電話をかけてね。…あ、おつかさんそんなにゴシゴシ拭いちや痛いわよ！…それでね、忙しいってくるくる走り回るの、まるでメイプル・ツリーの葉がダンスしているみたいだったわ」

「それは大変でしたねえ。次に先生方に会ったら、先日はご苦労さまでした、お陰さまでエヴァは無事に家に辿り着けました。ちゃんと、目を見てそう伝えるんですよ」

「分かってまあす。…こうでしょう?」

エヴァがくすぐったそうに体の向きを変えると、お母さんの方にキラした紫の瞳を向けました。

「…ね、私の瞳はママ譲りのアメジスト。私はなんだってママにそっくりなのよ。おひさまが照ってる五月の朝が一番好きなどころとか、けれども雨の日に窓ガラスをつたう灰色の水も大好きなところとか。クリスマスのキャンディーを何より楽しみにしているのも、八歳のママとまったく同じだったのでしょうか?」

「そうですね。でもね、お母さんはそんなに恥ずかしがり屋じゃあなかつたわ。先生に出会ったら、先生が口を開くより前にハロー、と

ちようどこんな風にごあいさつしたものですよ」

「…ふうん」

エヴァの水に濡れた金髪が、首筋にびったりと張り付いてピカピカと光り輝いて視えました。あかあかと紅潮した頬っぺたと、うつすら紫色の唇。さつきまで雨に濡れて冷え切っていた彼女の健康的に肉のついた肌は、もうあたたかみを取り返していたのです。それどころか、カツカと熱を放っているようでした。

突然、お母さんが手を止めました。ちよつとばかりぎゅつと眉根を寄せて、エヴァの頬に手を当て、それから眩くように、険しい声で言ったのです。

「熱すぎるわ。ええ、おかしいわ。」

おかしいわ、おかしいわ、と繰り返しながら、お母さんはエヴァをリビングに連れ出しました。それからエヴァの服をすつかり脱がせると、さつきの倍もあるタオルを新しく取ってきて、まるでミイラにするかのようなすごい勢いでぐるぐる巻きつけました。もともと分厚いタオルを幾重にも巻いたので、とうとう最後はスノウマンみたいに膨れてしまいました。

「今、あついチキン・スープをこさえますからね。エヴァはその肘掛け椅子で、あつたかく、じいつと待ってなさい。…そう、眠って仕舞うのがよいでしょう、きつとあつという間ですよ。」

そこまで言われて初めて、エヴァは自分が高い熱を出していることに気付きました。

確かに、身体中がポツポツと熱いようなのです。体の芯に暖炉があつて、焚木をゴウゴウ燃やしているみたいでした。暖炉の火は、雨に濡れて冷たくなったエヴァの指先や唇を溶かして、それでも満足することなくドンドン燃えひろがり、いよいよ熱っぽく踊り狂います。

途端に目の前が霞むような気がしました。それは目の奥がカツカと熱くなって、それから涙が滲み出て来たからでした。エヴァは肘掛け椅子にゆっくり腰をおろすと、はあと一息つきました。風邪を引いたのも何かしら因果関係ならば。きつと急に体を冷やしたりあつためたりしたので、体が吃驚したのでしよう。

エヴァはお母さんの言った通り、このままぼんやり熱っぽい気持ちに身を任せて眠ってしまおうと思いました。

…その時。

雨が叩きつける窓際に、キラリと小さな光が反射しました。うすい紫の雫のような、優しい宝石の光。エヴァが瞳を小さく見開きました。

ーアレハ、オツカサンノ指輪ダワ。

エヴァは思わず手を伸ばしました。…いいえ、伸ばしたつもりだったのです。何故ってエヴァはタオルにぐるぐる巻きで、親指の一本さえ動かすことは出来なかつたはずなのですから。

しかしエヴァは手を伸ばし、そのアメジストの指輪を捕まえて、そおっと手のひらに乗せることが出来たのです。

「ねえ、指輪さん。かあいそうねえ、窓際に置いてきぼりなんて。本当に綺麗なアメジストなのに。」

エヴァは両の手のひらを、ちょうど水を掬う時のように合わせて口に近づけて、そんな風にささやきました。

ー違うわ、違うわよ

「……？」

水晶のように透き通った指輪の上にちよこんと腰掛けたうす紫の妖精が笑ったのが見えたような気がして、エヴァは瞬間跳ね上がるように顔を上げました。

…幻でしょうか。

…ええ、ええ。そうに違いありません。

何故って、エヴァは熱が出ているのですから。朦朧として、空気の揺らいだのやら遠くで弟がおふぎけに鈴を鳴らしたのを間違えたに決まっているのです。

そう心を納得させて前を見据えたエヴァ。

けれども。やっぱりちよつと気になるのです。確かめるだけよ、  
幻だったと確かめるだけなのよ、言い訳のようにそう何度も心の中で  
繰り返しながら、エヴァはそおつともう一度手のひらに目を落としま  
した。

「…ハロー、エヴァ！ 元気そう、とはとっても言えないのねえ。貴女  
が風邪をひいたのは何時ぶりかしら。」

エヴァはあんまりびっくりして、今度は手のひらを勢いよく閉じま  
した。パシン、とかなりいい音が響きました。ドクンドクンする  
心臓が、耳のすぐ後ろに鳴っています。エヴァは息を潜めて、できる  
だけゆつくりとまわりを見回しました。誰もいません、おつかさんも  
弟も例え歌を歌っても聞こえないくらい遠くにいるようです…：ほ  
んの少しだけ安心してから、エヴァは心を落ち着けて、もう一度手の  
ひらを開いてみることにしました。

「…あら吃驚した。いきなり手を閉じるから、私妖精なのに潰れちや  
うんじやないかと思つたわ。このアメジストの指輪が死んじやうま  
では、私だつて死ねないって解つてたのにあらまあおかしいわ」

くつくつ笑つて、まるでそこにいるのが当たり前とでも云うように  
堂々と、妖精がエヴァを見上げました。指輪と全く同じくらしいの大き  
さで、透き通つた腕や足は、お裁縫箱の中の針みたいに細い妖精。し  
かし今にもポキッと折れてしまいそうな体は、案外頑丈なようでし  
た。なぜつて、エヴァがさつき勢いよく手を閉じたのにもかかわら  
ず、背中の繊細で美しい羽には傷ひとつついていないのですから。

「あら忘れてた、言いたいことがあつたんだつたわ。…ねえ、貴女言つ  
たわね。置いてきぼりなんてかわいそうにつて。そんなんじやあな  
いのよ。置いてきぼりつて云うのは、そこにあることを忘れられた  
り、二度と連れて行く気がなかつたりする時に使う言葉でしょう。エ  
ミリアは、そんな薄情な人ではないんだから。」

…エミリア。エヴァのお母さんの名前です。

「あ、でもねえ、いかにも忘れられた憐れな古品ふるしなですつて格好だつたの

は認めるわ。だって窓際ですもの。おひさまの光に輝いているんならまだ綺麗かもしれないけど、こんな嵐で灰色の曇り日になって、くすんで見えても仕方ないと云うものでしょう。」

言い終わると、妖精は氣どつて顎に手を当てました。エヴァが、まあ綺麗だわ、優雅極まりないわ、なんて興奮して熱心に見つめる間に、妖精はフワリとエヴァの手の中を飛び立ちました。そうして宙でタランと一回転して、ちよつと後ろへ行くと窓枠のそばに腰掛けたのです。

「…ねえ、妖精さん」

エヴァは夢見るように囁きました。

「おつかさんは何故に指輪を置いていったのかしら。あのアメジストはねえ、シヨツピングで、それともパーティーでもいいけれど、とにかくおつかさんが嵌めていないのは見た事がないくらいに大事なもののよ。うっかり忘れられたんじゃないや、どうしてあんな場所に置いたのかさっぱり判らないわ」

雨の雫のように透き通った体をもつ妖精が、会ったばかりの時とそっくり同じようにくつくつ笑いました。

「そりゃあもう、雨だからよ。轟々イレクトリック・レイルカーみたい  
に風が唸ってねえ、黒雲がモクモク湧いて地球全部を覆っちゃうような日  
が来たら、それこそアメジストの最高に輝く瞬間！ああ今からぞくぞくしてきたわ」

随分とおかしなことを云う妖精ねえ、とエヴァは考えました。宝石が輝くのは、日光の下に、星灯りの下、月灯りや、燃ゆる火のそばに決まっています。アメジストって、はてそんなに不吉な石だったかしらと頭を悩ませるのですが、まったく思い当たる節がありません。

「と云うのもね。太陽の光は強いよ、何よりも。儂いアメジストなんか一遍に貫かれて、どんだん命が漏れ出してしまうんですから。けれどもねえ。」

「ーはんたいに、雨の空になったなら。」

妖精が一際光り輝き、透明な髪までがシヤランと煌めいたように見

えました。

「……淡い色が、そばにいる人を慰めるために一層輝くのよ！」

妖精がうれしそうに飛び立ち、渦を巻く小さな虫サイズのハリケーンが其処ら中に光の粒子を撒き散らしました。よくよく見れば、妖精が魔法で巻き起こす旋風の真ん中になにか、金色の粘り糸のようなものが集まっているようです。まるで砂糖を大鍋で溶かした時のベツコウ色のような、…いいえ、まさにそれそのものなものでした。

妖精がケシの粒より小さく細い指をくるりと回します。すると、それに合わせて空中の粘り糸がぎゅつと互いに引き寄せられて、あつという間に小さな小さな飴玉ができあがったではありませんか。

「ほうら、できた。雨とキャンディのおまじない、舌でとろけ喉には潤い、病気の膿を沈めちゃう。さあ召し上がれ、あーん。」

エヴァはなんだか妖精の勢いに吞まれるようになって、口を大急ぎに開けました。

「そうら。」

予想よりもずいぶん優しい掛け声とともに、妖精の魔法の飴玉が舌の上に乗っかりました。

「んぎゅっ」

瞬間、思わずエヴァは目を瞑りました。

…あまずつぱいのです。まるで百万個ひゃくまんこの桃の果樹に囲まれたみたいに、咽せ返るような強い薫り。

ジュワジュワといくらでも滲み出てくる果実の汁が、エヴァの全てを溶かして葬り去ろうというかのようにでした。しかし不思議なことに、それら全ては優しく、慈愛に包まれた純粋な愛で出来ていました。

………ヴァ、エヴァ

頭のとっぺんから爪先まで、熱い汁が全身を駆け巡って沸騰したか

のような感覚が一気に身を震わせました。ああ、眩暈のように世界がぐるぐる回っていて止まりません。エヴァは一層ぎゅつと体を縮めて……

まったく唐突に、全ての味と薫りが消え去りました。

「……エヴァ、エヴァ」

「はっ。……あ、あれ私って今まで……。おつかさん？」

エヴァが目を開けると、なんだかよい匂いが鼻をつうんとつきました。慌てて体を起こすと、目の前から妖精と金色の桃飴は綺麗さっぱり姿を消して、代わりにエプロン姿のお母さんが、湯気もくもくと湧き上がるチキン・スープの鍋を両手に捧げ持っていたのです。窓を叩く雨の音は、幾分か小さくなったようでした。

「エヴァ、起きましたね。そうら、ご覧なさい。よく眠っていたようでしたから、あつという間にスープが出来ましたよ。…お皿に掬いますから、ゆっくり冷まして頂きましょうね。風邪のうちは無理をしないで、一杯だけで我慢するんですよ」

エヴァは、びっくりして言いました。

「……あのう、おつかさん。私、なんだかもう治ってしまっただみたいな」

お母さんはエヴァの顔色を見て、そしてスープの鍋をテーブルのごとんと置いてからあらためてエヴァの頬っぺたに触れました。それからもうエヴァの顔色をもう一度じっくり眺め回してから言ったのです。

「あらまあ、本当に治ってしまったのねえ。あなたが寝ている間に、一体何があったのかしら。」

それはね、妖精さんがね…、とエヴァは嬉しそうに答えようとして、手に持っていたはずの指輪の感触がないのに気がつきました。それどころか、お母さんに体中ぐるぐる巻きにされたタオルのせいで、手を一寸も動かすことが出来なかったのです。

あれは全部夢だったのかしら、とエヴァはちよつと泣きそうになって、お母さんの方を振り向きました。

…途端、エヴァはあつとさけぶところでした。

今日はお出掛けの日じゃないのです。ですから、これはいつもだったら起こらないことなのです。ああ、お母さんは何もかもを初めから知っていたのでしょうか。

ーお母さんの左手のすべすべしたお指に。

あの妖精が守るアメジストの指輪が、紫色にキラキラ煌めいていたのでした。

## 秋のかき氷

ーあれはきつと、私が九つの時だったのでしよう。おじいちゃんが目の手術のために入院して、数日の間：正確には二晩と半日だったのですが、おばあちゃんが家に一人ぼっちになったちようど秋の季節。

お料理のからつきしなおばあちゃんを心配したお母さんが、自分は忙しいのでその代わり、私を送り込みました。私は自分が頼りにされて、ちよつと誇らしげな気分になったのをよく覚えています。ルンルン鼻歌を口ずさみ、行ってきまあす、と元気に赤い靴を鳴らして家を出発しました。

秋の土曜日。優しい風の吹く日、両手にバスケットをさげて歩いたバス通りの景色。全て忘れようとしても忘れられない：大切な思い出です。

◆？

樹里は赤い靴を履いて、両の手には籐のバスケットを提げて、ある家の門扉の前に立ちました。深呼吸で吸って、吐いて、もう一度吸って。そうして意を決して、チャイムに手を伸ばしました。：どうやら錆び付いているようです。樹里は顔を真っ赤にして、両手の親指が痛くなるほどぎゅうぎゅう押し込んで、それでようやく小さなピンポンの音を鳴らすことが出来ました。

錆びているのは、どうやらチャイムだけではありませんでした。目の前の鉄の門扉は、あつちこつちが赤く剥がれているのです。その格

子の間からは、草がぼうぼうに伸びた石畳のようなものが見えていました。

お化け屋敷にも見える少し不気味なお家の前で、樹里はごくりと唾を飲み込みました。…もう引き返せません。ここまで乗り継いできた緑色のバスは、明日の朝にならないと帰ってこないのですから。

ーギーイ、バタン

ドアの開く音。樹里は、思わずピンと背筋を伸ばしました。バスケットをぎゅうつと握り直します。

(…トヨおばあちゃんに、失礼のないようにするのよ。良い子ですねえって、きつと褒めて頂くのよ。)

樹里は祈りました。…どうか優しいおばあちゃんでありますように。まちがっても、子供嫌いの偏屈な人が出て来ませんように。樹里の作ったご飯を、美味しいねえって笑って食べてくれる人でありますように。

いったい、樹里のお祈りは届いたのでしょうか。

ドアの隙間から、ずいぶん小柄な人がひよいと顔を出しました。白髪の優しそうなおばあちゃんが、じろりと樹里の姿を捜してこちらをはたと見据えました。

「…おいで。鍵は空いてるよ」

そっけなくそう言って、おばあちゃんはパタンとドアの向こうに引っ込みました。

なんだか、樹里は肩透かしを食らったようで、戸惑いながら門扉の真鍮の取っ手に手をかけました。

「……お邪魔、しまあす…」

元気よくしようと待ち構えていた挨拶がしりすぼみに小さくなつて、樹里は戸惑いながら家の中へ入って行きました。

ボタン。

いきなり後ろでドアが閉まりました。玄関は、橙色の柔らかい光に包まれていました。

急に暗いところに入ったので少し怖くなりましたが、向こうの部屋から真つ白な太陽の光が漏れているのを見て、樹里は少し安心しました。

上を見上げると、トヨおばあちゃんの顔がずいぶん近くにありました。

「泊まる道具はあるね。リュックに入れたのは良い判断だ。…それからバスケットを持っているね。旅支度としてはあんまりよろしくない。一体何が入ってる？」

目があった途端に、そんな事を聞かれました。

…いえ、樹里だつて確かに荷物について質問して欲しかったのですけれども。もつとこう、やさしく、興味を持った瞳でバスケットを見てくださいと思っていたのです。

樹里は戸惑いながら口を開きました。

「…あのう、お土産です。母さんからは柿が二つ、父さんから、夕食用の牡蠣。それから、一番上の紫のお花は…私がお花屋さんで買ったかきつばたです。」

なんだか妙に遠慮してしまつて、樹里はできるだけ小さな声で説明しました。

トヨおばあちゃんは、樹里の様子も何にも気にしない様子でズカズカ言いました。

「ふうん。柿、牡蠣、かきつばた。なんだかつまらないね。もつとヘンテコなものくれると思つて結構期待してたんだけどね。」

「…私の母さんが、おばあちゃんは季節ものや日本の伝統のものが好きだからつて、そう言つたんです。それでてつきり……」

トヨおばあちゃんがジロリとこつちを見つめたので、樹里は急いで黙りました。

おばあちゃんはハアとため息を一つ吐くと、樹里の思ったより案外優しい声音で言いました。

「覚えておきな。何十年も真面目に生きてきたら、馬鹿馬鹿しい事の一つも試してみたくなるもんだ。」

へええ、と樹里が目丸くしていると、おばあちゃんが続けました。「ふん。よし決めた。柿も牡蠣もかきつばたも、全部夜に後回しだ。あんたの母さんから聞いてるよ。樹里、あんた天ぷらが得意料理なんだろう、夕食に作る予定だって。…だから昼は、なんか突拍子もないものを食べる。」

…その時樹里は、母さんの言葉を思い出していました。

あの人は掃除も洗濯も、庭仕事も。お料理以外はなんでもできるんだから。そうです、トヨおばあちゃんは、母さん憧れの主婦だったと言います。

しかし、今はちよつと違うようだと樹里は思いました。

五年前に会った時は、いつたいどうだったのでしょうか。樹里はまだ幼かったので、覚えていません。母さんは、おばあちゃんの変化を知っているのでしょうか。

樹里は不思議な心地でおばあちゃんを見上げました。そうしたら、ここにきてから初めておばあちゃんが嬉しそうな顔で唇を綻ばせ、こんな宣言をしたのです。

「ーよし、昼食はかき氷だ。」

「え？おばあちゃん？…。」

「…あのう、かき氷マシンはあるのですか？」  
「ないよ。」

樹里は、どう言ったらいいのかわからずに一瞬口をつぐみました。だって、そうでしょう。お昼ご飯にかき氷。しかも今は九月で、もう薄いカーデガンが必要な季節なのです。

「…ど、どうやって作るんでしょう。」

樹里はやつとの事で、それだけを言いました。

かき氷マシンがなければ、どんなに食べたいと思っても食べられないのがかき氷なのですから。

「どうって、氷で作るんだよ。」

トヨおばあちゃんは事もなげに言いました。

…ですから、本当にどうやって作るつもりなんでしょうか。

「ああ、倉庫にトンカチがあるから。取ってきておくれ、エノコロ草がぼうぼうのボロ屋だよ。右の壁見ればぶら下がってるからすぐわかる。」

…まさか。

「と、とんかちで割ったのを食べるんですか。」

「そうだよ。早くしな、昼餉の時間はもう一時間も過ぎてるんだ。」

樹里はとびあがって、ほっぺたを突き通るように青くして、そうして荷物を全部玄関に投げ投げると大変に慌てて庭に飛び出しました。

…けれども、しばらくして樹里は手ぶらで家に戻ってきました。すぐさま台所に駆け込んで、おばあちゃんの姿を探します。

見つけたら、開口一番こう言いました。

「…おばあちゃん。台所の卸し金を使えばきつと簡単ですよ。」  
「……………あ、なるほど。」

いつもトンカチで氷を割っているのでしょうか？

樹里が戻ってきた時には、トヨおばあちゃんが、やけに手慣れたようすで妙にギザギザの跡がついた氷の塊を木の盥にあけて、ちようど蜂蜜の瓶を用意したところでした。

どうにも気まぎれなつて、しいんと静まりかえつてしまつて……と  
うとう堪えきれなくなつた二人が、いつぺんにふき出しました。

「まあまあ、馬鹿な事をしたいと言つても、頭まで悪くなつちや敵わないね。…いや、それはそれで楽しそうだが。」

そんな事を言つて頭をかくおばあちゃんに、樹里は言いました。  
「おばあちゃん。何故だかさっぱりわからないけれど、今樹里はとっても面白いの。身体中が楽しいつて悲鳴をあげてるみたい。人生、今日ここからなんでもうまくいく気分よ。」

二人は笑つて笑つて、笑い続けました。

そうして、樹里が最初苦手に思つたトヨおばあちゃんも、いつの間にかすつかり良い人のようになっていたのです。

ようやく笑いを納めたおばあちゃんが、こちらを振り向きまします。

「そうさ、あんたの言う通り。人生、うまくいくよ。あんたのアイデアと私の我儘で作り上げるこのかき氷に誓つてね。」

そう、樹里の顔を真つ直ぐに見て、ニヤリと笑つたのです。

あの日から数えて、ちょうど十五年目。

おばあちゃんは、死にました。二度と会うことは叶いませんでしたが、私の記憶には艶やかな燕子花のパープルや柿や貝の牡蠣と一緒に、ニヤリと笑ったあの顔がはつきりと焼き付いています。

そうです。おばあちゃんの言う通りでした。

人生、うまくいくのです。

辛い時は、雪の降る日も油蟬の外で煩く鳴き喚く日も、黙って氷の塊を卸し金ですりおろしました。空っぽの牛乳パックに水を入れて冷凍室に突っ込んで、いつでもトンカチでかち割れるように準備しておきました。

：拝啓、天国のおばあちゃん。

貴方のおかげで、私はどんな時も腐らずに乗り越えられました。

氷の冷たさと蜂蜜の甘さが沁みる日に。

私はいつでも、貴方のあったかい贈り物を思い出します。

私たち家族が贈ったバスケットのお返しは、ちゃんと届けられていたのですね。

ーーありがとう、おばあちゃん。

貴方と私の、一生の思い出。

「あつ痛！」

どたんとかかが重いものが倒れる音。ガシヤツという金属の不協和音。松葉杖についてそろりと一步を踏み出したタチの、つるりと滑って転倒した音が小さな病院に響き渡りました。

「タチくん！」

慌てて若い看護婦さんが駆け寄りました。床に蹲るタチは声も出せずに歯を食い縛っています。

「…院長先生、早く！」

部屋に駆け込んできた初老のお医者さんが、呼ばれるより前に早足でそばに寄りました。ひどく焦った顔をして、院長先生はやっぱりダメだったと少し後悔しながら、それでも外面上は落ち着いた声で的確な指示を出しました。つまり、骨折が治りかけていたタチの脚を検査し直すのです。

タチは、すぐにレントゲン室に運ばれて……。

◆？

「はい、足をあげて。ゆうっくり、ゆっくり。太腿から、そうです。」  
「いたたたたい！」

「がまんがまん。はい、頑張つて。……ほら、どうしたの」

訓練用の車椅子に座つて足を上げる練習をしていたタチは、突然唇を横一文字に突つ張つて、やおら看護婦さんのいない壁の方を向きましました。

「…いやだ。どうせ治りやしないよ。」

看護婦さんは、びっくりして言いました。

「治りますよお。確かに、あなたが初めに入院していたところは、ダメだったかもしれないね。あそこは整形外科専門じゃあなかつたんですから。…言つては悪いですが、治療費が安くて先生の情が特別厚いだけの、貧乏な病院ですもの。けれどもここは、骨折したところ専門の病院ですよ。リハビリ中に症状を悪化させるなんて失敗は絶対ありません。タチくん。きみの意欲さえあれば、必ず治るんです。」

「…まさか。たったの一週間で。」

「タチくん？やりましようつたら。ねえ？」

看護婦さんはしばらくタチを宥めたりすかしたりして頑張りましたが、タチはただじつと壁を見つめるばかりで何も言いません。とうとう看護婦さんは諦めて、そつとしておいてあげようと決心したのか静かに病室を後にしました。

タチは一人になりました。

途端、じんわり涙が滲み出てきました。

(…ああ、僕はなんてばかな事をしたんだろう。わざわざ石段の八段目に昇って、誰が一番高い場所から跳べるかふざけて競争して。)

悔しくて悔しくて、タチは泣きました。

知っているのです。父さんが悪い奴に騙されて、小さな会社はペしゃんこに潰れました。借金を返すまで、家族全員が気をつけて節約しなければなりません。それだから、タチが病院に入院できるのは一週間なのです。これでさえもギリギリなのです。

ふわりと風が入ってきてタチの頬にあたりました。

「…タチくん…？ お友だちから、御見舞い品ですよ。わざわざ沖縄からのお届けモノですよ。」

さっきの看護婦さんが戻ってきたのでした。タチは向こうの壁を

向いたまま、身動きもしません。

「……ここに置いておきますよ。」

看護婦さんは、静かに出てゆきました。

ーにわかには、タチが車椅子の向きを変えました。

「……………」

黙って、看護婦さんが置いていった包みに近づいて行きます。小さな机の上を覗き込みますと、茶渋の粗末な紙包が寝ていました。袋は、麻紐でちようちよ結びに縛ってあります。

包みの隅っこに、小さく差出人の名前が書き付けてありました。

「……………あらがき、じゅん……………潤？」

タチはびつくりしました。それは小学生の頃、タチが沖縄に住んでいた時に仲良くなった男の子の名前だったのでした。今の今まで、すっかり忘れていた何年も前の記憶なのです。

幼い頃の眩しかった毎日を思い出すと、ふいに懐かしいような、何だか苦しいような心地に駆られて、タチは急いで麻紐に手を伸ばし解きはじめました。するりと紐は解けました。中に詰められていた干し草の塊のような緩衝材をとりのけます。…と、タチはあっけに取られて口をぽかんと開けました。

「…シークワーサー？」

包みの中身はすだちによく似た、沖縄特産の柑橘だったのでした。

みつつの水々しいシークワーサーが、ゴロンと仲良くテーブルに転がり出ました。

「…なぜ、突然に……………潤はこんなものを送ったんだろう？」

タチは呆然とシークワーサーを見つめました。そもそも、一体潤

は、どうやってタチのいる病院の住所を知ったのでしょうか。

「タチはしきりに首を捻りながら、包み紙ごと手で持ち上げてベッドに運んでいきました。」

病院特有の真っ白な壁にピッタリくっついたベッドには、まっさらなシーツ。少しの汚れもゆるすまじと綺麗に洗われてある布団の上に、タチは反抗するような気持ちで干し草の緩衝材をぶちまけました。みつつのシークワサーは、大事に並べてシーツの上に置きました。

「……っそり一人で食べてしまおうか。いや、少し切れ目を入れて置いておけば部屋に良い匂いが薫るかもしれない。」

タチは車椅子を横向きにベットにつけ片足を床に下すと、ゆっくりと体をずらしてベッドに乗り移り始めました。：本当は看護婦さんの見ている前でやるべきなのですが、呼んでこようとはどうしても思えませんでした。

「うわあっ」

おしりをベッドにつけた瞬間です。

病室に潮風がビュウウツと吹き荒れて、突然ベッドのシーツが真っ白に泡立ちました。タチはあつと叫ぶ間も無くずうんと沈み込んで周りを群青の泡に囲われました。冷たい泡に揉まれて髪がぶわあつと逆立ちます。

落ちます。落ちます。どこまでも落ちてゆきます。

「くあっぶ、っあぐ」

タチは無我夢中でもがきました。

もがいているうちに、落ちる速さはだんだん遅くなつていきました。だんだん泡は溶けてなくなり、視界がさあつと開けた頃、ついにタチはぶかんと宙に浮かびました。タチは目を見開きました。冷たい夜空のような光景が、すぐ目の前をどこまでも広がっていたのです。

(…あれえ。僕は海に落ちたようだぞ。)

タチはあたりを見まわしてそう思いました。そうです。いつか赤い夕焼けの日に飛び込んだ時の、意外な暗さに驚いた沖繩の浅い海です。ゆらりと珊瑚礁が身をよじって脚に絡みつこうとするのを振り払って、タチはもう少し上の方に向かって泳ぎました。

「ーハアイ。タチ。」

「やあ、潤しゅん。本当に久しぶりだねえ。」

そこら中を赤や黄のカラフルな魚たちが泳いでいるのと全く同じ自然さで、Tシャツに短パン姿の潤が…：ちようど別れてから八年分の歳をとった潤が、海の中に浮かんでいました。

ー八年前と同じ、人懐っこい笑顔。魚みたいに華麗に泳ぐ、近所で一番の素潜りの名人。

タチは、潤がそこにいる事になんの不思議も持ちませんでした。だって、居たんですもの。それだけです。タチは、ただ笑顔を浮かべて語りかけました。泡が口からぶくと漏れ出します。

「…ねえ。教えておくれよ潤。きみのシークワサー、どうやって送ったんだい。それに僕はどうして今海にいるの。不思議だな、ちつとも息苦しくないよ。」

タチが問いかけると、ぷかぷか浮きながら潤は目を丸くしました。「忘れっちゃった？タチ、あのガジュマルとキジムナーさあ。きみにあげた木彫りのシーサー、ずうつとポケットに入れているんじゃないの？」

言われて、タチは急いでズボンのポケットを探りました。

途端、コツンと何か硬いものに手が触れました。出してみると、それは紛れもなくあの木彫りのシーサーでした。

ーあつたのです。あの時にもらったシーサーの木彫り人形が。

タチが驚いて顔をあげると、潤はどうだい、とでも言うように誇らしげな顔で腕を後ろに回しました。

その顔を見てみるとタチは何だか申し訳ないような気持ちになつて、そわそわ落ち着かなくなりました。何故って本当は、タチはシーサーの事なんかすっかり忘れていたのです。すべて思い出したのはたつた今でした。タチと潤は八年も前に遊んだ時、確かにガジュマルの木のある潤のうちで、キジムナーとプレゼントの交換をしたのでした。

「…僕、失くしちやつたと思つてた。潤もキジムナーも、忘れちやつたと思つてた。」

タチがそう言うのと、潤はあからさまに顔を顰めました。

「忘れるはずないさあ。僕たちが、魚好きな妖精のキジムナーのために何時間も釣りや素潜りをして、そのかわりにもらつた大切な贈り物じゃないかあ。」

…そう、そうでした。

真つ赤に燃えるような髪をふり乱した妖精が、潤とタチのために彫つてくれた魔法のシーサーです。

『ーこれで二人は繋がってるんだらなあ。世界の法則なんてぜんぶ吹っ飛ばしちやうんだあ。』

そう言つて、恥ずかしそうに向こうへ走つていった、妖精キジムナー。

魔法の人形だとは、キジムナーは一言も言いませんでした。それでも、潤とタチはよくわかつていたのです。

「オレは、毎日ポケットに入れていたぜ。そうしたら、今日の朝に変な感じがしたのさあ。オレは台所に行つて迷わずシークワサーを

とつてきた。紙で包んで、縛って、それからポケットのシーサーをぎゅつと握ったらもう「道」が開いたんだからな。」

「道？」

「そうさあ。この海がそうだ。オレたちふたり意外には、だあれもない。八年前の沖繩の海と、なんにも変わってないだろう。」

潤の言う通りでした。

タチは怪訝な表情から一転して幸せそうに笑うと、昔みたいに潤の手を取って泳ごうと平泳ぎに体をくねらせ……

「痛っ！」

突然、右足に鋭い痛みが走りました。

びっくりして顔を下に向けると、タチの足はー骨折しているのだから前なのですが、雪のように白いギプスでぐるぐるに巻かれました。

「ダメさあ、慌てちゃあ。」

潤が笑いながら水中を滑るように泳いできて、くるりとタチに並びました。

「ほうら、水の中はリハビリにはこれ以上ない格好の場所さあ。いいだろう、絶対に転ばない。」

タチには、何だか潤がこっそり訓練の様子をクスクス覗いていたような気がしました。

しかしそんなことはまったく気にしないで、タチは潤の言う通りに、足の動くところを少しずつフィンみたいにゆらし出しました。

「そうそう、時間は無限さあ！夢も希望も海の水とおんなじだけあるんだもんなあ！」

潤は顔中で笑いました。ニカツとこちらを向いてふいに言ったのです。

ーだから。ちからあ、抜いて。頑張れ。

…その言葉が合図だったかのようでした。タチはいきなり臍の内側をぐいっと引つ張られて、あっと叫ぶ間も無く暗闇と泡の中に放り込まれたのです。潤のほうへ手を伸ばして繋ごうとしましたが、もう無駄でした。

もがいて潤の名前を呼ぶうちに、タチの体はどんどん上へ運ばれていって……

「……どうだい、眠って気持ちはずっきりしたかなタチくん。」

「……あ……院長先生」

タチはベッドに倒れ込んだ格好のまま、はっと目を開きました。上から立派な白衣の眼鏡のおじさんが、優しそうな笑顔でタチの顔を覗き込んでいました。

タチはゆっくりとあたりを見回します。院長先生の隣には、さきほどの看護婦さんが心配そうに身を小さく縮めながら立っていました。

「きみは、とても気持ちよさそうに眠っていたね。どうかな、リハビリはやる気になったかな。」

「……シーサー」

院長先生の声に被せるようにして、タチは思わず眩きました。

「ん、何か言ったかい。」

院長先生の声も耳に入らず、急いで病院着のズボンのポケットを探ると……ありました。ゴツゴツしているのに何だか優しい、木彫りの

シーサー。キジムナーのシーサー。

ぽろりと夕子は涙を落としました。

ぎゆうっと小さな木の塊を握りしめます。潤じゅんは沖繩に、キジムナーも沖繩に。それでも、みんなあの広い海でひとつに繋がっているのです。

ー夢も希望も、海の水とおんなじだけ。

突然夕子は顔をあげて、元気よく院長先生に言いました。

「やるよ、リハビリ。僕、一週間で松葉杖なしで歩けるようになってやるよ。」

夕子の宣言に、院長先生も看護婦さんも、なんだかほっとしたように肩を落としました。

ミンミンゼミの鳴き声が、急に風に乗って窓から流れ込んできました。夏の病院に、シークワサーの香りが静かに広がっています。

## ほうきぼし

ほうきぼしは、真っ白な火の尾をひきながら、今日も銀河の海を元気に駆け回っていました。ほうきぼしとは名前のおり、体のはじっこで燃える光がまつすぐにのびて、ほうきのしっぽみたいに光り輝くのです。本当にゆかいな旅でした。ときどき、流れ星の子供たちが何百も何千もかわいらしい笑い声を沸かせながらドオツと横切っていくときなんかは、ほうきぼしも一緒に笑ってしまふのでした。

ですから今日もいつものように、口笛を吹きながらミルクの天の川を滑ったり、海中でちゅうがえりを五回もやって得意げに格好をつけたりとゆかいに遊んでいたのですが、ふとほうきぼしは不思議に思いました。

(ボクはなぜに、いつも光っているのだろうか?)

しっぽをあかあかと燃やしながら、ほうきぼしは考え込んでしまいました。

(燃やしたら、ボクの体はちいさくなっちゃうじゃないか!)

それでも、自分は明るく光っていなければならぬのだと、ほうきぼしは知っていました。そう、みんなに言われてきたのです。自分のお父さんとお母さんだつて、いつも火の玉みたいに輝いてうれしそうにしていました。……でも、いったいなぜでしょう?

いくら考えても分からないので、ほうきぼしは誰かに聞いてみることにしました。

まずはじめに、いつもメガネをかけて本を読んでいる、賢そうなかじき座のお兄さんのところへ行きました。

「なんでも知っているかじき座のお兄さん。聞きたいことがあるんです。」

そう声をかければ、かじき座は何やら難しそうな文字でびっしり埋まっている本に目を向けたまま、めんどろくさそうに返事をしました。ほうきぼしは一生懸命に言いました。

「ボクは、なぜに光らなければならぬのでしょうか？」

「それが、義務だからだ。」

と、かじき座は言いました。

「ぎむって何ですか？」

「…絶対にしなくてはならないことだ。つまり、ほうきぼしは必ず光らなければならぬのだ。」

「どうして？」

「危険だからだ。」

おもおもしろくかじき座が言って、それではなしは終わりでした。それからは、うんともすんとも返事を返してくれません。ほうきぼしは諦めて、次のところへ行きました。

「いつも青くからだを輝かせているイルカ座さん！ぜひとも聞きたいことがあるんです。なぜにボクは光る義務があるんですか？」

ゆうがなジャンプで泳ぎさろうとしたイルカ座を寸前で呼び止めて、ほうきぼしは息せききって聞きました。

「危ないからよ、坊や。」

と、イルカ座はやさしく言いました。

「どうして？」

「この銀河は暗いからね。ずうっと夜の世界だ。」

ほうきぼしはなおも聞こうとしましたが、あつというまにイルカ座は行ってしまいました。

気をとりなおして、ほうきぼしは銀河の海をめぐり出します。行く途中、とびうお座に出会いました。とびうお座にもたずねてみようと思いましたが、それは叶いませんでした。小さなほうきぼしをちらりとみてばかりにしたようにふんと息をつく、ほうきぼしが口を開こうとするよりも前にチャチャチャツと翔びさってしまったからです。

ほうきぼしはビューンと波うちぎわまでとんで行くと、銀の砂の上でもぞぞ潜り込もうとしていたかに座にも声をかけてみました。

「ボクが光るのはなぜでしょう？ この銀河がいくら暗いって、

いつも海ホタルくんたちの出す銀の粉でぼうっと明るいじゃあないですか。ライトをピカピカに灯さなくても、ちゃんと見えますよ。誰かにぶつかったりしませんよ。」

かに座はフォツフォツと笑いました。

「それでも、危ないのじゃ。ほうきぼしのこぞうよ。」

そして、さっと砂に黒々とあいた穴の中へすがたをけしました。

ほうきぼしは悲しくなりました。たったひとりで銀河の海を旅するチビこぞうに、誰かがしんせつに教えてくれるでしょう。誰もいませんでした。

(こうなったら、光るのをやめてしまおう。)

そうほうきぼしは決心しました。生まれてこのかた、一度も絶やしたことの無い火の尾を、ふっと消したのです。あたりが静かに暗くなりました。だんだんと、ぼうっと天の海をおおう金の霧や、遠くでながれぼしの子供たちがかけて行くピカリといっしゅんの光などが見えるようになってきました。

そうして、静かな興奮とともに、ほうきぼしはすべり出したのです。(見えるじゃないか！こんなに銀河ってうつくしい世界だったなんて…ああ、ボクは知らなかったよ！)

しかし、機嫌の良いのも長続きしませんでした。とつぜん誰かに呼びとめられたのです。

「おい、そのほうきぼしの坊…そうだ、お前を呼んでいるのだ。この永遠の夜にライトをつけないとは何ごとか。」

驚いてふりむくと、そこにはほうきぼしの何倍も大きな体をうねらせた、うみへび座がいました。そこなしの井戸よりもっと深くまつくらな眼が、瞬きもせずじいっとほうきぼしを見つめていたのです。

「う、うみへび座さん。…じつは、その。ボクが光らなければならぬ理由を教えてくださいようか。」

ほうきぼしはすこし怖かったのですが、一生懸命にがまんして言いました。すると意外なことに、うみへび座はきちんと説明してくれました。まず、ながいながい体をくねらせしっほのさきに何かをすくいあげるような格好をしました。うみへび座のキラキラ光る鱗の上

には、はじめ何もないように見えたのですが、そのしつぽがほうきぼしの顔に近づけられるにつれてだんだんと見えてきました。

「海アメンボくん！」

ふわりん、とうみへび座のしつぽの上でちいさなーほんとうにちいさな虫がはねました。思ってもみなかつた出会いにびつくりしたほうきぼしへ、うみへび座はしずかに語りかけました。

「こういう生き物のために、おまえは光るのだ。自分がまわりを見るためではない。ほうき星が通るから危ないぞと、他の生き物へあかるいライトで注意を呼びかけるためなのだ。」

「見る」ためではなく、「見てもらおう」ため。

ほうきぼしは、不思議な気分になりました。そんなこと、考えたこともありません。でも言われてみれば、たしかにそのとおりだったような気がしたのです。ほうきぼしは、ようやくなつとくしました。

「どうもありがとうございます、うみへび座さん！」

お辞儀をして、親切なうみへび座とわかれました。

ほうき星は、幸せそうにまつ白な火の尾をあかあかと燃やし、今日も銀河の海を元気にかけまわるのでした。